

葛飾応為「吉原格子先之図」 —肉筆画の魅力

太田記念美術館 23. 11. 01～11. 26



「葛飾応為」(生没年不詳)は、「葛飾北斎」の娘である江戸時代の浮世絵師で、世界で十数点しか作品が確認されていないが、「北斎」とは異なるその印象的な作風は多くの人々を魅了し続けている。

「肉筆画」は、浮世絵師が筆で紙や絹などに直接描いた作品で、彫師、摺師の協力で制作され、多くの枚数が摺られる版画とは異なり絵師が直接仕上げる「一点ものの作品」である。

当館が所蔵する「肉筆画のコレクション」は、古くは「菱川師宣」「喜多川歌麿」「葛飾北斎」から明治時代の「小林清親」に至るまで、浮世絵の長い歴史や幅広いジャンルを保有している。

<本展の見どころ>

約3年半ぶりに公開された《吉原格子先之図》は、西洋画のような陰影を駆使した描写により、江戸の遊郭である吉原の夜を劇的に描き出している。

お客たちが手に持つ提灯や妓楼の室内の明かりなど、いくつもの光源が画面に描かれて光に照らされた人々の姿が幻想的に浮かんでいる。

1. 肉筆画は、「北斎」「歌麿」「清親」ら浮世絵師たちが、紙や絹に描いて仕上げた貴重な“一点もの”で、繊細な描線、美しい色調など、絵師の筆致を知ることができ贅沢に使われた顔料の美しさも見どころである。
2. 「北斎」「歌麿」「清親」 —浮世絵師たちの筆致を知る。



北斎《羅漢図》



歌麿《美人読玉章》



清親《両国橋之図》